佳作

久しぶりに夏を見上げて

石川県 野々市市立布水中学校三年　藤原 歩美

　私は夏に対する憧れがある。紺碧の空に大きくて真っ白な入道雲。夏の思い出は人生を鮮やかにしてくれる。ただここ数年、コロナにより夏のイベントは多く制限された。夏休みに友達とショッピングに行くだけでも安易に外に出られないような状況が続いて、夏といえば、といったことがなかなかできないでいた。コロナ禍で物足りない夏を過ごした人は多かったと思う。今年になるとようやくコロナが落ち着いて、四年ぶりに長岡まつり大花火大会が通常開催されたので、私は高校生とフリースクールのみんなで参加した。

　日本三大花火なだけに当然人は多く、人波をかき分けて席に着いて、

「やっと着いたね。人混みで疲れたね。」

と話しているうちに最初の花火が打ち上がった。打ち上げ花火を見るのは五年ぶりで、私は息を呑んだ。

　塗りつぶしたような黒い空に飛び抜けて明るい赤や緑の光が弾け、想像以上の音と振動が全身を伝う。それが連続して、最後に大きな花火が上がる。何も考えられなかった。現実のものではないくらい綺麗で。

　次々と花火が咲いて、花火は目と耳で感じるだけじゃなく、全身と心でも感じられると気づいた。振動を肌で感じ、屋台からくるお祭りの匂いなどが五感をくすぐる。これらが重なるから非日常感があって胸が高鳴るのだ。

　そして、花火の中でも私は柳がお気に入りだ。柳が消えていくとき、まるで無数の星が空から降ってきているようだった。大きく広がって夜空を彩り、消えてなくなる。この儚さ、短命さが花火の美しさたる所以だ。

　じっと空を見つめ続けて、その日一番の大きな花火が上がった。私の視界は端から端までその花火。ドーンという音が胸を貫いたとき、自然と涙が流れた。驚いた。感動で涙が出たのは初めてだったから。みんなにバレないように下を向いたけれど、辺りは暗くて結局気づかれない。みんなあの空に集中して、同じ花火を見ている。この会場にいる十何万人がだ。一つの花火がどれだけの人の視線を引き寄せるんだろうか。そう思ったらまた視界が滲んでしまった。花火は素敵だ。人を感動させることができて、思い出に残ってくれる。そして何より、コロナで長らくなかった夏の思い出を、みんなと共有できたことが嬉しかった。私達は確かに一緒にいて、花火を見たんだ。ようやく夏が戻ってきた気がする。

　間違いなくこの日は今年の夏一番の感動だった。心臓で直接感じる衝撃と、視界が花火で埋め尽くされるあの体験は忘れられない。目の中が全部きらきらしてあの光に魅せられて、目と心がそれに夢中になった。それだけあの花火は美しかった。でもなぜか、胸のどこかが寂しい。夏はあとどれだけあるだろう。あともう少しだけ、心を奪われていたかった。来年も見たい。みんなで見たい。

　ああ、やっぱり私は夏が好きだ。